

ノーベル賞大村智博士から届いた手紙

「認可を妨げるもの」

救えた命だったのではないか。元NHKアナウンサー、末利光氏（89）は、2人の妹を、新型コロナウイルスで次ぎ失った。療養中に、わずかな望みを託したのが治療薬「イベルメクチン」だった。ノーベル賞化学者の進言をもとに、一刻も早い服用を担当医に掛け合っただけがかなわず…。その慟哭の告白である。



2人の妹を亡くした末利光氏（右）と元NHKアナウンサー・大村智博士（左）は旧知だった

元NHKアナウンサー、悲痛の告白

イベルメクチン服用できず 妹2人はコロナで死んだ

83歳
78歳

感染連鎖の悲劇！

保健所に電話を入れ、朝9時にA病院受診。PCR検査陽性によりそのまま入院。4月18日 付き添い時に自分の症状を伝えた芳枝さんもA病院で受診。PCR検査の結果、陽性となったが、ベッドの空きがなくB病院へ搬送される。17日に入院した貴久子は翌日には集中治療室に入り、人工呼吸器をつけました。でも19日には急激に呼吸が悪化し、「酸素投与は

しているが、いつ心臓が止まっても不思議ではない」と担当医から連絡が入ったのです。医師たちもどう対応していいかわからず、手探りで治療している様子を感じました。心肺停止の電話連絡が入ったのは、それから4日後のこと。歩いて病院に行った人が、たった6日間で命を落としてしまうとは。私はこの感染症に、恐れおののくばかりでした

出てくださり、事情を話すと「米国で、現在使用できる薬の中でイベルメクチンがコロナに有効という研究論文が出たばかりです。しかも飲み薬だから、服用しやすいですよ」と仰ったのです。私は、その夜のうちに大村先生の進言を文書にまとめて、芳枝の入院する病院の担当医にFAXしました。米国の研究チームは20年1～3月に新型コロナウイルス感染者のデータを分析。169の医療機関でイベルメクチンを使った患者と使わなかった患者各704例を比較した。結果、人工呼吸器を必要とした患者でイベルメクチンを使った場合は死亡率が約3分の1に減った。また患者全体では約6分の1に抑えられた。「FAXを送った翌24日、担当医に電話し、「万一のことがあれば私が全責任を負います。先生に責任を持たせることはしませんか

「私は、新型コロナウイルス感染症で2人の妹を相次いで亡くしました。2020年4月のことです。持病もなく、あれほど元気だった妹たちをあっという間に打ち倒し、穏やかな暮らしを崩壊させた新型コロナウイルスの恐ろしさを、まざまざと知ることになりました。大きな悲しみと同時に、今もなお憤りとやり切れないさを抱えています。妹たちは救えた命。だったのではないか、との思いからです。今はワクチンや抗ウイルスの飲み薬も始めているため「時期が早すぎましたね」と言われることもあります。でも、それは違います。なぜなら当時も新型コロナウイルスに有効とされる飲み薬イベルメクチンがあり、

それを服用できれば助かったかもしれないからです」第1波が襲った1昨年4月、服用させたかったイベルメクチンとはどんな治療薬なのか。その前に末氏の独白から、妹たちが感染した経緯を追っていく。「私は8人きょうだいです。姉の久子（92）、妹の芳枝（2020年当時83歳）と貴久子（同78歳）の3姉妹は、東京の小石川後楽園に近いマンションで生活していました。甲府に住む私は電話で時々連絡をとっていました。父が起業した「末商会」を継いで、社長を務めていたのが、一番下の貴久子です。そして芳枝は声楽家として活躍。認知症の症状が出始めていた姉・久子を支えながらも、ともに独身の3人は不自由なく暮らしていたのです。そこに、新型コロナウイルスが襲いました。まず感染したの

は貴久子でした。彼女は銀行やスーパー、歯医者に通うのが日課でしたが、行動範囲は限られていて、そのどこで感染したかは今では知るよしもありません。それからまもなくもう一人の妹・芳枝も家庭内感染してしまったのです」時系列を整理する。4月10日 貴久子さんに37度台の発熱や倦怠感。翌日に自宅近くのクリニックを受診。4日間様子を見るようにと言われ、飲み薬をもらって帰宅。4月14日 芳枝さんにも風邪のような症状が出て、かかりつけ医へ。飲み薬をもらって帰宅。4月16日 安倍晋三首相（当時）が初めての緊急事態宣言を全国に拡大。4月17日 貴久子さんの熱は飲み薬により一時は下がったものの再び38度台前半の発熱と咳。クリニックが

(※) おおむら・さとし 2015年、抗寄生虫薬「イベルメクチン」開発でノーベル生理学・医学賞受賞。北里大特別荣誉教授。イベル

イベルメクチン服用できず妹2人はコロナで死んだ

あとに、意外な文章がつけられていました。イベルメクチンが有効と多くの治験データがあるにもかかわらず、(WHO「世界保健機関」を始めとする規制当局は、イベルメクチンの認可を妨げております。しかし、イベルメクチンの使用を認可し、使用しているインド、インドネシアなどでは成果を挙げ、コロナ感染症を沈静化しております。ところが、皮肉なことにワクチンを70〜80%接種したと言っている国で感染者が増加している様子です。サイエンスがビジネスでゆがめられている結果です」

「大村先生が、WHOなどがイベルメクチンの認可を妨げていると、ここまで明言されたことに、私は大変驚きました。それだけ大村先生も、イベルメクチンが新型コロナウイルスに有効とされているがら正当に評価され

ず、今も苦しむ患者を救えないことに、忸怩たる思いがおりなんでしょう」

WHOは大手製薬会社から多額の寄付金をもらっている、その「汚染体質」を指摘する声もある。新型コロナウイルスの飲み薬としては米製薬会社メルクが開発した「モルヌピラビル」に続き、ファイザー製も承認された。だが、まだ薬の数自体が少なく、投与は一部の患者に限られているのが実情だ。現在日本でも、医師の裁量によりイベルメクチンの新型コロナウイルスへの「適応外使用」が認められている。

今年1月31日、医薬品メーカーの興和はイベルメクチンに対して「オミクロン株に対しても、デルタ株などの既存の変異株と同等の抗ウイルス効果があることを確認した」と発表し、だがWHOなどが使用を推奨しない立場を貫くことか

ら、今も処方のためらう医師は真逆のものでした。家族なら人工呼吸器をつけても少しでも長く生きてほしいと望むのが普通です。でも、口から出たのはまったく別の言葉でした。それを聞いた芳枝は小さく「ありがとう」とだけ言って電話を切ったのです。

27日午前、イベルメクチン使用について倫理委員会を通ったと連絡が入りました。でも、その直後に芳枝の容体が急変。午前11時10分、還らぬ人となってしまったのです。

家から絶賛されました。感染症のため誰も火葬場に入れないまま奈昆に付された遺骨は自分のあいだ、東京の菩提寺で預かっていただくことになりました。また葬儀社には、2人の妹の遺骨を分骨してペンダントに入れ、送ってくれる

師は多い。特許がすでに切れたイベルメクチンの薬価は、日本では1錠約650円。対して、メルクやファイザー製

「私の妹たちが亡くなった20年4月は、時の安倍政権がオリンピックという一大イベントを前に、積極的な新型コロナウイルス対策をとっていませんでした。国際オリンピック委員会のバッハ会長は大会後、『大成功という評価で一致した』と述べましたが、私は何をバカな、と憤怒しました。

東京オリンピックの招致活動や開催に一体、どれほどの賄賂や巨額な金銭が動いたのか。オリンピックで多大な利益を得た人たちがいて、今度はワクチンや飲み薬で巨大な富を得ようとしている人たちがいる。彼らは患者の命など、どうで

もいのでしょうか。日本で新型コロナウイルスで亡くなった人は1万9000人以上です。でもその遺族には何の補償もありません。いわば死に損です。その遺族たちは今、いったいどのような生活をしているのか。事実、3姉妹が住んでいた東京の高級マンションは今も彼女たちが出て行っただまの形で残されています。

本誌・島海美奈子

ノーベル賞大村智博士から届いた手紙「認可を妨げるもの」

ら」とイベルメクチンの使用を再度、お願いしました。それでも、聞き入れてもらえませんでした。

翌25日、再び担当医にイベルメクチンを使ってほしいと懇願すると、『そのためには病院の倫理委員会を通す必要があります。週末は倫理委員会がないので、早くて月曜(27日)になります』と言われました。

担当医に思わず電話で声を荒らげました。そうであれば、なぜ昨日のうちに倫理委員会を開いてくれなかったのか。私はすでに妹1人を亡くした経験から、新型コロナウイルスはまさに一日一日が患者の生死に大きく関わるのを知っていました。でも若く経験もない医師は、インフルエンザ程度にしか捉えていないようでした。

芳枝から私に電話があったのは26日のことです。あまりに弱々しく細く、しわがれたその声。声楽家の芳

枝は張りのある美しい声の持ち主でしたが、まるで別人のようでした。芳枝はこう言ったのです。

「お兄ちゃん、もう時間がないらしいの。人工呼吸器をつけるか、そのまま自然の状態の時を待つか。今、選択しなければならぬの。たまたま傍にいて意見を聞いた友人の住職は『本人の自由』とだけ言いしました。私はそれを復唱するように『おまえの自由』と大きな声で告げました。実はこれは、私の本心と

WHOが慎重な姿勢を貫くワケ

●4月27日 芳枝さん死去

「結局、芳枝は人工呼吸器を使用しませんでした。もしつければ、病から回復しても声楽家としての声は失われてしまうから。その決断は、『歌い手としての思いを貫かれた、見事な最期でした』と同じく多くの声楽

よう頼みました。そして病院に残された遺品は、『1カ月間開封厳禁』の赤い札が貼られて、それぞれ私のもとに送られてきたのです。苦しみと痛み、死への不安とともにたまった1人で亡くなる時の思いとは、果たしてどんなものだったのか。それにしても、芳枝の死には無念ばかりが募りました。『何も決断できない未熟な若い医師に現場を任せ、先輩医師たちは助言もしなかつたのではないか』

「倫理委員会が芳枝を見殺しにしたのではないか。そんなさまざまな思いが脳裏をよぎり続けていました。

事実、姉・久子(当時90歳)は濃厚接触により新型コロナウイルスに感染しながら、最後は陰性となり唯一生き残ったのです。姉はかかりつけ病院で陽性判定を受けたあと、なぜか専門病院に回されることなく入院。一般病棟の二室をつなげてビニ

ールで囲んだ独自の特別室で、丁寧に対応してくださったのです。今は私が引き取り、山梨の施設で暮らしています。これは高齢者だけではなく、病院の対処による部分が大きかったことを物語っています。

新型コロナウイルスに罹った人や家族の多くは、不利益を被るからと、その事実を隠すのが普通です。でも私はジャーナリストとして、新型コロナウイルスがいかに恐ろしい病かを多くの人に伝える責務があると考えて、一冊の本にまとめようと決意しました。

そして昨年10月末、「コロナに翻弄された家」(小社刊)を出版しました。その本を大村先生に献本すると、お手紙を返していただいたのです。(実に悲しいせつない、そして痛々しい物語をこ恵与頂き有り難うございました)との言葉の

灵芝ご愛飲の皆様、おトクなニュースです!

日本をはじめ、アメリカ・中国の州、国立大学でも研究用に採用された

高品質 飛騨灵芝

よいものだからこそ長く愛飲してほしい、そう考えたから、この価格が実現しました。三十五年以上にわたる科学的な研究、栽培実績の成果を結集したのが「飛騨灵芝」です。その品質は国内・海外で高く評価され、研究用灵芝として採用されています。*「飛騨灵芝」は高麗産です。

1kg 30,000円
500g 17,000円

http://www.dai-yakusan.co.jp/

飛騨灵芝 第一薬産

0120-32-0963

第一薬産株式会社